

少しでも 贅沢を、

私たちの暮らしの中へ。

特別な記念日でなくても

さりげない毎日の生活の中に、
自分だけの贅沢をもってみる。

たくさんなくていいのです。

ほんの小さな勇気があれば
憧れは手に入る。

それが暮らしの視野を広げる基本です。

とっておきの時間を過ごすために
少しでも贅沢を、
自分自身へどうぞ。



1987.12.16(水) 6:30
 1st 狂言 ^{starting} ござる 乃座

野村武司 乃世界

「'87. PARCOキャンペーンより」

蚊相撲と雷

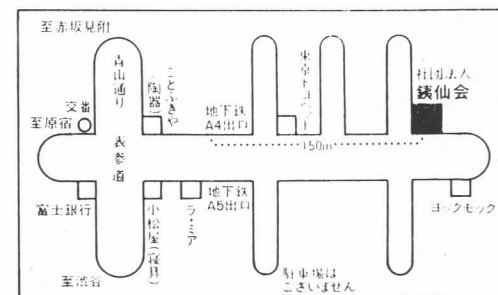
後援 五大学狂言研究会連絡協議会

入場料 一般 2500円
 (全自由席) 学生 1500円

お申込み 東京都文京区小石川 5-6-9-1505
万作の会 方

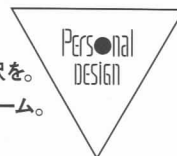
電話 03-944-6063 (平日10:00-17:00)
 郵便振替 東京 8-22075 万作の会

於・鏤仙会能舞台



●地下鉄表参道下車(銀座線・千代田線・半蔵門線)A4出口より徒歩3分
 〒107 東京都港区南青山4-21-29 電話(401)2285

ほんの少し、自分だけの贅沢を。
 パーソナルデザイン、三井ホーム。



・大きな信頼・
 (社)日本ソーバイフォー
 建築協会正会員
 三井ホーム株式会社
 本社
 〒163 東京都新宿区
 西新宿2-1-1
 新宿三井ビル15F
 ☎03(346)4646
三井ホーム

Introduction

五狂連

か ず も う
蚊相撲

大名
野 村 武 司

太郎冠者
野 村 万之丞

蚊の精
野 村 万 作

かなり
雷

雷
野 村 万之介

薮医者
野 村 武 司

野 村 良 介
地謡 野 村 耕 介
野 村 史 高

Communication

野村武司他五狂連と観客の皆さん

— 解 説 —

蚊相撲

現代の求職者には多くの高度な資格が要求されている。「英検、秘書検、簿記、そろばん。」室町時代にも、職に就くには様々な能力が必要であった。「弓・鞠・包丁・碁・双六・馬の伏せ起こし、やっとまいった(相撲のこと)。」さて、新しく相撲が得意な召使いを雇った大名は、早速手合わせ。しかし、この召使いは恐るべき武器で大名に迫るのだった。その武器とは、彼の手に光る一本のストロー……。(見どころ)

- ①相撲の取り方。太郎冠者の行司。大名の激しい巻き返し。そして、最後に敗れ去るのは？
- ②新しい雇い人の顔(「うそふき」の面。)これは、口をとがらせた、ひょっとこの原型。風に吹かれ飄々と飛ぶ蚊の動きに注目。
- ◎この蚊の精とは何だったのか。蚊の媒介する病によって命を失う人も多かった中世。その恐怖が巨大な蚊に体现されているのかもしれない。

雷

七名の高校生サーファーが今年の夏、雷の直撃を受けたことは記憶に新しい。現代の我々の科学をもってしても、この様に大変恐ろしく、ただその前にひれ伏すほかない。しかし、ここに雷と対等に渡り合った男が一人いた。その名は、薮医者。彼は都ではうだつが上がらず、思い切って東国へ下った。その行く手には、雷との運命的な出逢が彼を待ちうけていたのだった。(見どころ) 薮医者と雷との出逢いの場所、武蔵野に着いたシーン。雷のいでたち(恐った様な、笑った様なと、顔の向きによって見方が異なる「面」、腹につけた鞆鼓に注目)。最後の舞——狂言では、この舞がめでたい。◎またこの他にも狂言の音楽性(薮医者 of 登場テーマ、雷の昇天の謡等)が数多く織り込まれている。そしてもう一つ、薮医者は狂言界の「赤ひげ」だった。

武司でござる

野 村 武 司

「ちりちりや、ちりちり」と謡いながら突然男の子がお茶の間の画面に乱入した時、狂言や僕を知らない人は「何これ、何やってんの」と思った事であろう。時代・文化の進化の加速度がどんどん高くなっていく今、古典というものに投身するのは時代に逆行する行為と思うだろう。しかし裏を返せばなぜ新人類の一人として数えられている僕が狂言なんてやっているのだらうと思われないか。その疑問からおいで下さってもいっこう構わない。とにかく来て下されば、狂言＝化石の偏見は打ち碎かれると思う。伝統というものは普遍的な事をテーマとしつつ、だからこそ時代々々に即応し今日迄受け継がれてきているのだ。

僕はこの会を通して、狂言の普遍的な事、テーマ、セリフまわし、型をまず継承体得しつつ、その様式の中で観客の皆さんから現代を吸収し反映していきたい。そのために今をときめく青山のスキンスリップをとり安い鍬仙会の舞台に決めたのだ。

それでは「ちりちりっ」と浮きに浮いて楽しみましょう。ちりちりやちりちり、ちり……。

ごあいさつ

五大学狂言研究会連絡協議会(五狂連)委員長 前 田 誠 司

狂言が現代演劇、メディアとしての使命を後進に譲ってから数百年余りにもなる。その間、数々の演劇、メディアに影響を与えることはあっても、狂言自らが時代の中心に再び登場することはなかった。演劇・メディアの本当の力は、時間と空間、そして感性が送り手(演者)と受け手(観客)と一体化し、共有されることによって生まれる。ところが今日のメディアたちは受け手を見失ってはいないだろうか。狂言が長い眠りから目を醒ますのは今だ。狂言が時代の中心、先駆けとなるには、時代の心を持つ観客と演者が必要である。それはつまり、先人の知恵を凝縮させた型に、時代を生きる者たちの肉体と感性を織り混ぜた狂言である。我々観客は、新しい狂言・演劇・メディアを演者とともに探求し、作りあげねばならない。私達五狂連は観客の一人として、新しい狂言、まずは九十年代の狂言と一緒に体験していきたい。21才の狂言師、野村武司に期待したい。

野村武司略歴

昭和41年東京生まれ。野村万作の長男として3歳の時から狂言の舞台を踏み、現在は東京芸術大音楽部邦楽科に在籍。初舞台以来、能楽堂での公演や、ヨーロッパをはじめとする海外公演を精力的にこなしてきた。60年には黒沢明監督作品「乱」に出演。62年春にはPARCO“能”ジャンクション、夏にはPARCOのポスター、新聞広告、TV・CMに出演し話題を集める。

武司通信

- ①狂言ござる乃座は、年3回公演の予定。
- ②昭和63年1月16日から18日までの3日間、PARCO・スペースPARTⅢにおいて野村武司を中心とする若手狂言師達の公演が4回行われる予定。
- ③昭和63年4月、PARCO“能”ジャンクションに出演予定。